
世界のあこがれる国ニッポンをめざして

(矢作征三、巨大災害に立ち向かうニッポン、パピルスあい、東京、2015、p.13-29)

2015年12月11日、災害医学抄読会 <http://plaza.umin.ac.jp/~GHDNet/circle/>

わが国では、災害が多発する島国という特殊環境が、巨大な不確定要素に対する最大限の確実性という目標の追求へいざなった。それは社会ルールを守り、お互いに迷惑をかけないように心がけるといふことがあるが、しかし弱者を軽視することにはならず、留学生の目からはむしろ個々の命をより重視するよう見えるという。例えば、障害者が電車に乗る時の駅員の付き添いなどに見て取れる。それは平和社会を目指した戦後日本の70年間の成果であり、東日本大震災の際の支援や応援メッセージで実感したように、世界の人々の日本への評価・期待は高い。

アメリカと同様に日本も、大きな変革を繰り返し成長してきた。社会参加意欲や成功願望が減少し、内向き傾向を強める若者が話題になって久しい。それが逆に、大きな社会変革が始まる前夜の時期という感じを受ける。

第1の課題は真のグローバル化である。企業には、海外への積極的な進出が求められている。日本の企業にとっての困難の背景には、文化的な多様性を企業文化に取り入れるというこれまで国内では経験したことのない事態との遭遇がある。日本の当たり前が全く通じなくなるのが、この文化的多様性である。多様性とは、ビジネス環境が変化していくなかで企業は人種・性別・年齢・信仰などにこだわらず多様な人材を受け入れ、彼らの能力を最大限に発揮させようという考え方だ。日本でも個々の違いを受け入れる動きが出始めているが、まだ多くの日本人は多様性を受け入れるようになっていない。たとえ外国人を雇ったとしても、その人の特性を抑え日本方式の「型枠」に入れようとし、その人が貢献する機会を十分に活かしていない。

海外で働くのが当たり前になる社会だから、子供の頃から多様性を学ばせようとしなければならないが、教育のあり方そのものに根本的な問題がある。生徒に同じように教えるのが基本であり、はみ出すことは許されない。様々な価値観を受け入れ、格差も受け入れなさいといえるようになるには長い道のりがありそうである。

グローバル社会では、人種や信条が異なっているからといって、一方の価値観を押し付けるのは許されない。日本はこれまで日本人としての価値観を強く守ってきた。それによる良い面をたくさん持っている。しかし、だからといって、それを相手に押し付けることは許されないのがグローバル化、多様化である。相手を尊重し、仲間として受け入れることは、自分の感覚や価値観を犠牲にして受け入れることとイコールではなく、相手から異なった感覚や新しい価値観を教えてもらい、お互いに共有するというプラスになる面が多い。

第2の課題は危機管理である。災害が起きた直後は自分達のことは自分達で面倒をみる「自助」が不可欠になる。次に「共助」であり、「公助」は最後の段階で、もしかすると可能かもしれない、という程度であるとの認識が必要である。もう一度、既存の計画書を審査し、シミュレーション訓練を行い、有効性を確認し続ける必要がある。一説ではこの努力を10年間程度継続することで初めてより有効で実践的な計画書となるだろうと言われている。その過程を全体で共有することが肝要だ。